郡上八幡における地域認識としての サウンドスケープの実態とその構造

1X17D002-3　炓塲星澄*

本研究では岐阜県郡上八幡を対象に，住民の地域認識に対して音からのアプローチを試みる．インタビュー調査によって住民に認識されている音環境の実態を明らかにし，音環境がそのように認識される構造を明らかにすることを目的とした．その結果，住民が注意を向けて聴いている音が明らかになり，地域のサウンドスケープの季節的な構造と空間的な構造が明らかになった．また，地域認識としてのサウンドスケープの構造として，【具体的な場面での認識】によって下支えされた【まちや生活の中での認識】と【認識の変容】があることが明らかになった．

Key Words：地域認識，サウンドスケープ，郡上八幡，インタビュー調査，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

1．序論

(1) 研究の背景と目的

土木・建築分野では，まちづくりや景観計画をはじめとする実践を支える研究として，住民の地域認識を把握する取り組みが数多くなされてきた [1]．これらの研究は環境の視覚的側面から住民の地域認識を把握するものがほとんどであるが，人は環境を捉える際，聴覚，嗅覚，味覚，触覚といった視覚以外の感覚も用いている．人々の地域認識も同様に五感を通して知覚した環境が元となって形成されるはずであり，地域認識のより深い把握には視覚以外の側面から分析を行うことが必要だと考えられる．また篠原は今後の景観研究の展開として生命論的景観やアクチュアリティのある風景を提唱した [2]．吉村 [3] はこれに類似する風景体験をモデル化した風景出現モデルを提唱し，その条件として全感覚の動員を挙げている．このことから，生命論的景観やアクチュアリティのある風景といった概念を地域計画に取り入れていくためにも視覚以外の要素に着目した地域認識の分析が必要になると考えられる．

五感の中で特に音の意味的側面に注目した分野に，カナダの作曲家 R. M Schafer によって 1960 年代に提唱されたサウンドスケープがある．Schafer は，WSP（World Soundscape Project）での調査活動を通して「自分たちが『単純な音環境』だと思ってもその地域住民にとっては極めて複雑な方法で理解されることがある．この場合『単純だ』とする環境の評価そのものが外部者がそのような情報に依存して生活している者と同じような区別や微妙な差の理解ができないことを示していることになる」と一つの結論を導き出している [4]．このことからサウンドスケープ分野では地域研究的なアプローチで音の認識に関する調査が行われてきたことがわかる．

土木分野でのサウンドスケープを考慮したアプローチとしては，河川や水場のデザインに水音を取り込むことを目指した研究 [5][6]や市街地を流れる水路を対象とした研究 [7]がある．本研究の対象地である岐阜県郡上八幡は水路をはじめとする伝統的な水利用施設が残る地域であり，それらが発する水音についての研究 [8]も見られる．古川 [9]は生活景の観点から郡上八幡の音環境を調査し，住民の意識する音には従来から注目されてきた水音に加えて郡上踊りや時の鐘があると明らかにしている．

地域に根差した音が存在し，それを意識した生活が営まれている郡上八幡において，サウンドスケープの観点から地域認識を明らかにすることは，まちづくり・デザイン活動において全感覚的な視座を取り込むうちの，特に聴覚からのアプローチにつながると考えられる．以上の将来的目標を踏まえ，郡上八幡におけるサウンドスケープの実態の把握と，地域認識としてのサウンドスケープの構造を明らかにすることを本研究の目的とする．

(2) 概念の整理

既存の文献を参考に，本研究でのサウンドスケー

*早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 景観・デザイン 佐々木葉研究室 学部 4 年

プ及び地域認識の位置づけを示す．

サウンドスケープの定義として日本サウンドスケープ協会では Truax による定義を訳し「個人，あるいは社会によってどのように知覚され理解されるかに強調点の置かれた音環境．それゆえサウンドスケープは，個人（あるいは文化を共有する人々のグループ）とその環境との間の関係によって決まる」[10]と示している．また，2014 年に発行されたサウンドスケープ研究の国際標準 ISO 12913-1 での定義は永幡[11]の訳によると「あるコンテクストの中で，個人又は人々が，知覚・経験・理解した音環境」であり，「コンテクストは，時空間における，人と活動と場所の相互作用」であるとしている．

佐々木[12]は既存の地域景観研究を，地域の環境の状態に注目するものから景観を体験する主体に注目するものという軸に沿って 4 つに分類している．上記の定義から，サウンドスケープは人々に聴かれ理解された音環境であり，なおかつその人々は文化や活動，場所といった背景を共有する．したがって，ある地域に住むという共通の背景を持つ人々のサウンドスケープとは，佐々木による 4 分類のうち「地域住民の認識」に該当するものといえる．また佐々木[13]は「地域を相互に関係する複数の事象の統合としてとらえた上で，地域認識とは，その統合的な事象を主体がその主体なりに理解したもの」と説明しており，主体によって理解の仕方は様々であるとしている．

以上をもとに，地域に対してある程度共通した理解を持つ地域住民を地域認識の主体とし，特に音に対する理解を地域認識としてのサウンドスケープと呼び，本研究の研究対象とする．

(3) 既存研究の整理

フィールドの音を総合的に捉えたサウンドスケープ及び音環境研究は，Schafer らによる WSP の調査研究以降様々な取り組みがなされてきた．アンケートやヒアリングをもとに地域の人々が音に対して抱く印象を中心に調査した研究[14]がある一方で，フィールドの音環境の実態を，調査者の知覚や物理的指標をもとに記述することを中心にした研究[15][16]もある．音環境の実態と人々の印象の両側面を調査し，その関係を考察した研究[17][18][19]も見られ，これらに共通する大まかな方向性として，物理的音環境の調査，音聴き調査，アンケートやヒアリング等を用いた認識調査の 3 点が見られる．

一方で細かな調査手法に関しては一貫性が見られず，これに問題意識を置いて，記述モデルに関する研究[20]や測定手法に関するケーススタディ[21]，評価尺度に関する研究[22]など，サウンドスケープの方法論に関する研究も多く行われてきたが，ここで検討された手法を応用した研究の蓄積がないこともあってか，国内のサウンドスケープ分野での手法はいまだに確立されたものが無いのが現状である．

国際的な動向では，サウンドスケープ研究の国際基準として ISO 12913 シリーズが発行され，その中でインタビューガイドラインや調査法としてサウンドウォークが提示される[11]など，研究の方法論の確立，実践への応用へ向けた取り組みが本格化している．また，デファクトスタンダード的に用いられる評価尺度[11]が存在するなど，手法の確立がある程度見られる．しかし，翻訳に伴って生じる問題や住む国やその他の要素によって人々が音環境を認識する背景が変化し，それによって評価構造が大きく変わる恐れがあるとの指摘もあり，海外の手法を用いる際に検討する余地は多いと考えられる．

(4) 本研究の位置づけと研究方法

(2) で位置づけた地域認識としてのサウンドスケープの構造を明らかにするためには，音と聴取する主体それぞれの背景をより掘り下げる必要があるが，サウンドスケープ分野の既存研究で住民の認識を調査したものの多くは地域を表象する音や音の選好を明らかにするにとどまっている．音と聴取する主体それぞれの背景に着目した調査は，鳥越[14]が神田で行ったような特定の地域に密着したケーススタディ的なアプローチが適していると考えられる．

郡上八幡を対象とした古川[9]の研究では，音の選好や音の変化などを質問項目として設定したアンケート調査を実施し，それによって抽出された音に関してのヒアリングを行うことで，特徴的な音と日常生活の出来事との関係を明らかにしている．本研究では，質問項目を定めないインタビュー調査によって地域環境を構成する音を収集し，郡上八幡のサウンドスケープの実態を明らかにした上で，その認識の構造を，住民に語られた音にまつわるエピソードから分析する．

2. 対象地の概要

郡上八幡は，岐阜県郡上市の旧八幡町地域の市街地の通称である．市街地は長良川の支流吉田川によって北町，南町の 2 つに分かれ，遠藤盛数が永禄 2（1559）年に郡上八幡城を築いて以降発展した当時の城下町の構造が町割などに残っている．通りに面した間口が狭く，奥に長い間取りを持つ伝統的な住

宅である町家が多く残り，それらを保存する取り組みが多く行われ，2012 年には北町の一部が重要伝統的建造物群保存地区に指定されている．また寛文（1661-1673）年間に大規模に整備された水路をはじめとする水利用施設が現在まで残り，本町にある湧水の宗祇水は環境省の名水百選の第一号に選ばれている．環境省の「残したい日本の音風景 100 選」には「吉田川の川遊び」が選定されるなど，音においても水との関わりが見られるが，古川の研究では水関連の音の他に，郡上踊り関連の音，自然関連の音，時の鐘の音が挙げられている．

この中でも郡上踊りは国の重要無形民俗文化財に指定され，シーズンには 30 万人の観光客が訪れる重要な観光資源として位置づけられているが，地元住民の踊り離れがあることも指摘されている[23]．一方でもう一つの代表的な地域行事である春祭りは，氏子によって運営される神楽や各町内の子供会によって運営される子供みこしを含む，観光化されていない地域に密着した行事である．

3. 郡上八幡のサウンドスケープの実態

郡上八幡全体の音事象の収集のために，訪問によるインタビュー調査を実施した．（**表-1**），（**図-1**）インタビューの際に記録したメモから音事象の名称，時間，場所を抽出し，それらをもとに以下に結果を示す．

(1) 言及された音事象の傾向

インタビュー結果の一例として，収集した音事象のうち多く言及されたものの上位 10 個を**表-2** に示す．古川[9]のアンケート調査で得られた音の傾向と似て，用水路の音や川の音，城山にある秋葉三尺坊の時の鐘，郡上踊りの音や下駄の音などが多く挙げられた．また，人の話し声や自動車の音と言った，古川の研究で心地よい音，大切な音として言及されていないものも挙げられている．

インタビューの中では，単純に音事象が聴こえるという話の他，「以前は聴こえていた」，「普段は聴こえないがその分目立つ」などの言及のされ方をしているものもあり，言及される頻度には郡上八幡で頻繁に聴こえる音事象というより，住民の音に対する注意の傾向が表れていると考えられる．しかし，用水路の音は最も頻繁に話題に上がるにも関わらず，無意識に聴いている音としての言及もあり，Schafer のいう「基調音」と「標識音」[4]の 2 つの側面を有する独特な音事象であると考えられる．

表-1 初回インタビュー調査の概要

調査期間	2020 年 10 月 14 日（水）～11 月 5 日（木）
対象	現地住民 42 名
方法	地域的な偏りが出ないよう訪問し，面接．うち 6 名が住民の紹介による面接
時間	一人当たり 20 分～40 分
内容	事前に質問項目を設けず，八幡で聴こえる音について自由に回答してもらう．

表-2 頻出した音事象（上位 10 個）

音事象	言及した人数
用水路の音	15
時の鐘	13
人の話し声	12
郡上踊りの音	11
川の音	10
神楽の音	9
下駄の音	9
虫の声	8
自動車の音	7
神楽の練習の音	7

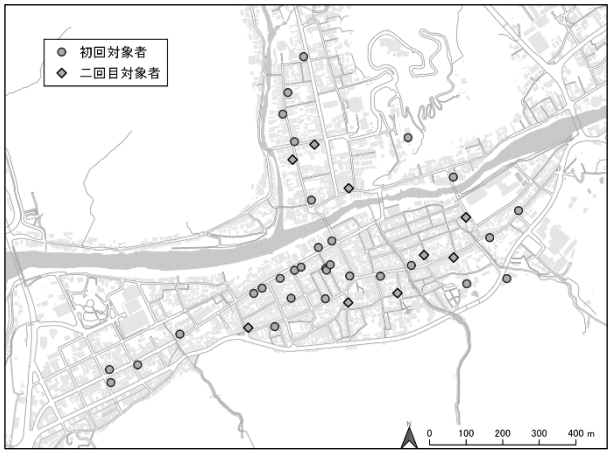


図-1 初回および二回目インタビュー対象者の所在地

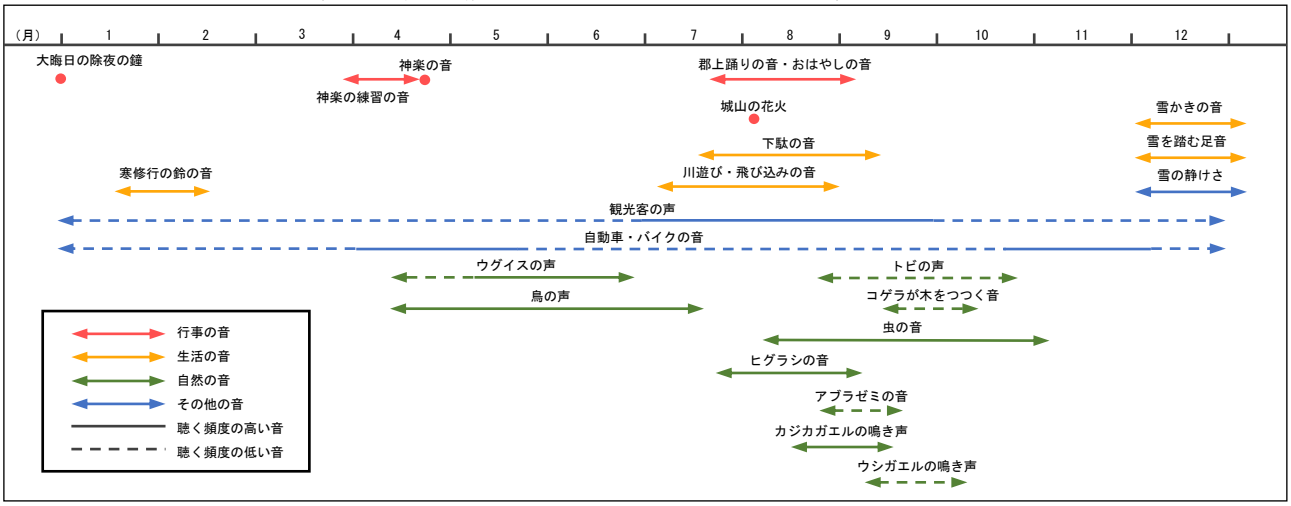
(2) サウンドスケープの時間的構造

インタビュー調査では，これらの音事象と併せて季節的な要素が極めて多く語られた．初回のインタビュー調査と後述する二回目のインタビュー調査の結果から作成した郡上八幡の一年間の音を**表-3** に示す．冬の音は極めて少なく，**表-2** に示された音の多くが春，夏，秋に集中している．また，一年を通して聴こえる観光客の声，自動車・バイクの音も，季節によって聴こえる頻度が違うことが指摘された．また，鳥の声，虫の音といったカテゴリの中でも，特にウグイス，トビ，ヒグラシ，カジカガエルといった具体的な種に対してはより細かく言及され，それらが鳴く時期，順番も住民の間ではおおむね共通して認識されている．また，2020 年の新型コロナウイルスの流行を受けて春祭り，郡上踊りが中止になったことに対して，これらの音が無いことにより季節感が薄くなったという指摘も多くなされた．住民には自然の音とあわせて春祭り，郡上踊りも季節的な音だと認識されていると推測できる．

(3) サウンドスケープの空間的構造

後述する二回目のインタビュー調査において，地図を用いて郡上八幡の音について聞き込みを行った．その際に得られたデータや，一回目のインタビューで指摘された音に関する場所を地図上に示した（**図-**

表-3　郡上八幡におけるサウンドスケープの季節的サイクル



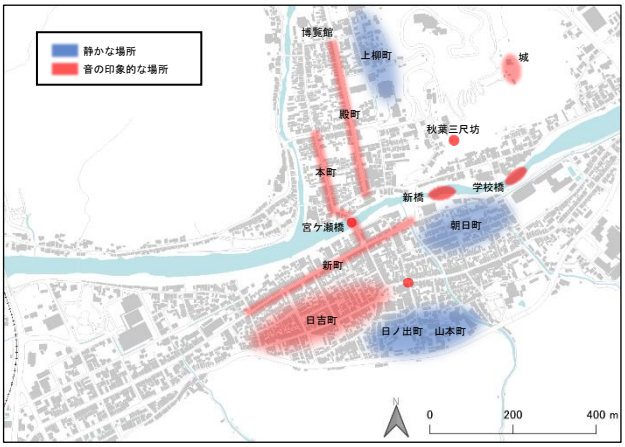


図-2　言及された音環境の分布

2)．新町，本町，殿町，八幡城は，観光客の声が聴こえ昼間はにぎやかな地域として挙げられた．一方日吉町周辺は，飲み屋が多くあり酔っ払いの声が聴こえるなど，観光地ではないがにぎわいがみられる地域として認識されている．宮ケ瀬橋と日吉神社の参道前の交差点は，春祭りの神楽が特別な曲と舞を披露する場所で印象的だという意見が見られた．また，吉田川のせせらぎを聴く場所として，多くの住民が上流側に瀬がある新橋と学校橋を挙げている．以上が住民の示す音の印象的な場所であるが，ここで挙げられた場所以外に対しては静かという印象が語られており，中でも際立って静かな地域は上柳町，朝日町，日ノ出町，山本町が挙げられている．

4. 郡上八幡における地域認識としてのサウンドスケープの構造

二回目のインタビューでは，初回のインタビュー時に収集できた主要な音事象に関する背景の掘り下げと，音にまつわるエピソードの聞き取りを，初回インタビュー対象者のうち 10 名に行った．調査の概要を表-4，表-5 に示す．なお，郡上八幡を離れて居住していた対象者については居住年数を分割して表記している．インタビューは録音し，書き起こしたテキストデータを分析に用いた．

表-4　二回目インタビュー調査の概要

調査期間	2020 年 11 月 8 日～11 月 16 日
対象	初回インタビュー対象者のうち 10 名 対象者 B，D はそれぞれ対象者 A，C の配偶者で，インタビューに一部参加している．
方法	事前に連絡をした上，面接． 対象者 E，F および G，H はそれぞれ 2 名同時にインタビューを実施した．
時間	一回あたり 1～2 時間
内容	初回のインタビュー以降新たに気づいた音，思い出した音についての質問と，初回インタビューで多く述べられた音に関する詳細の聞き込みを行った．また，地図を使用して郡上八幡の音について聞き取りした．併せて，郡上八幡の音にまつわるエピソードを適宜語ってもらった．

表-5　二回目インタビュー調査の対象者

コード	年齢	居住年数	居住地
A	80 歳	55 年	北朝日町
B	－	－	北朝日町
C	65 歳	50 年	本町
D	－	－	本町
E	80 歳	80 年	肴町
F	72 歳	50 年	上桝形町
G	44 歳	10 年	山本町
H	45 歳	2 年	南朝日町
I	63 歳	18 年，6 年	上日ノ出町
J	49 歳	20 年，6 年	下愛宕町
K	72 歳	18 年，50 年	大手町
L	56 歳	26 年	中坪

(1) 分析方法

地域認識としてのサウンドスケープの構造を明らかにするために，木下[24]によって提示された修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M-GTA）を二回目インタビューのテキストデータに対する分析手法として導入する．ただし，本研究では出身地，居住年数などの個人差も視野に入れて分析を行うため，その手法をアレンジしている．M-GTA

表-6　生成された概念とカテゴリー

カテゴリー名	概念名	定義
イメージとしての認識	季節性	音の聴取によって季節感が得られたり，補強されたりする印象があること
	地域的イメージ	ある地域・地区の音環境に対して抱いている総合的な印象
	空間的イメージ	地域に対するサイズ感や距離感などの空間的な印象と音の関係
	シンボル的な認識	行事や作品の中で音が引用されるなど，シンボルとして音が用いられること
媒体としての認識	状況の把握	音を手掛かりにして周囲の状況を把握すること
	近隣の生活音	近隣住民の生活の様子を伺い知れるような音が聴こえること
	時間感覚	音をもとにして時間感覚を得ること
無意識	無意識	特別意識されることはなく音が聴かれること
生活との密着	生活との密着	音が生活の中に溶け込んであると認識されていること
音の受容	音の受容	騒音的な音が受容，許容されて認識されること
町の人の心持ち	コミュニケーションの音	挨拶などのコミュニケーションのための音があること
	大らかな気質	地域的な人々の気質として，大らかなものがあるということ
	昔からの音への思い入れ	以前からの音に対して思い入れがあること
音の変化	音の変化	昔と比較した音の変化についての印象
構築環境の状態	町家の構造	町屋の構造的特徴が，音そのものを成立させたり音の認識を容易にすること
	町の形態	郡上八幡の家並みや通りなどの町の形態が，音の聴取に影響を与えていること
	寺院の存在	寺院が町にあることが，町の中の音に対しての印象に影響を与えていること
社会的状況	少子化	少子化による町の音への影響
	観光	観光と町の音との関係
	車社会	町や音と車社会との関係に対する考えや思い
自然との関係	自然への関心	動物や自然現象の音を聴き分けられたり，それらに対する知識の深さや興味があることがわかる様子
	自然の変化	自然環境の変化を音を通して理解，察知していること
	川に対する関心	川に対して深い知識を持っていたり，興味があることがわかる様子
行事との関係	行事への思い入れ	地域行事への思い入れが行事の音に対する印象を強めること
	行事との隔たり	地域行事やその音に対して隔たりを感じていること

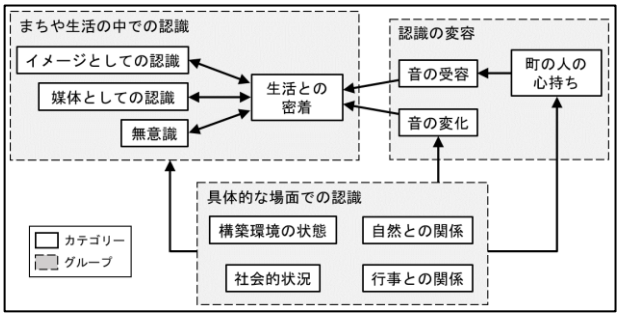


図-3　カテゴリー関係図

では，設定した「分析テーマ」「分析焦点者」の観点からデータを見ていき，関連する箇所を抜きだして概念を生成していく．オリジナル版を含む他の GTA ではまずデータの切片化をした上でコーディングを行うが，切片化された後では音との関連がわかりづらくなるエピソードを含めて分析を行うため，データの切片化を行わない本手法を用いる．本研究では分析テーマを「郡上八幡における，地域の音の認識の構造の研究」と設定し，分析焦点者を「郡上八幡の住民」と設定した．

M-GTA の具体的手順は次の通りである．まず抜き出したデータと，そこから生成された概念とその定義を 1 枚のワークシートにまとめる．加えて，抜き出した具体例に他の解釈はないか吟味し，そこで思いついたことや予想される他の概念との関係，その概念の対極例や具体例などを理論的メモとしてワークシートに書き加える．この理論的メモをもとに概念同士の関係を見ていき，概念のまとまりであるカテゴリーを生成する．このように，概念の生成と概念間の関係の確認を同時並行で行い，最終的には概念，カテゴリー同士の関係を図示して考察を行う．

(2) 分析結果の説明

生成された概念とカテゴリーを**表-6** に示す．また，カテゴリーをサウンドスケープの認識の段階ごとに括りその関係を示したものを**図-3** に示す．以下，グループを【】，カテゴリーを［］で示す．

a）全体像

図-3 は，郡上八幡における地域認識としてのサウンドスケープの構造を示している．この全体の構造は，認識のメタレベルの違いによってカテゴリーを分類してできた以下の 3 つのグループの関係において説明される．まず，メタレベルが低く直接的に音源との関わりがみえるグループである【具体的な場面での認識】がある．これをもとにしたメタレベルの高い 2 つのグループがあり，一方は音や意識の変容といったニュアンスを含んだ【認識の変容】であり，もう一方は地域アイデンティティのニュアンスを含んだ【まちや生活の中での認識】である．

以下，各グループのカテゴリー間の関係を，具体例を提示しながら説明する．なお，具体例の末尾には**表-5** で示した発話者のコードを記載する．

b）具体的な場面での認識

【まちや生活の中での認識】と【認識の変容】を下支えするグループであり，環境や状況との関係が直接的に示されている 4 つのカテゴリーによって構成される．例えば，以下の発話では町家の土間や坪庭といった環境から聴こえる音が述べられている．

- *例えばどっかの裏通りに入ってみると、何気なく下駄の音がコロンコロンする。例えばそこのおやじさんが風呂から上がって。…室内って言うかまあ、土間って言うか。*（J）
- *春かな。やっぱ鳥の音、結構家へ来るでな。みんな結構あの、小さいながらも庭を持っとるんや。*（K）

以上は具体的な音についての発話であるが，それぞれ【まちや生活の中での認識】につながる，近隣の生活の気配を察知する［媒体としての認識］や，［季節性］の一環となる音との関係が考えられる．

c）認識の変容

音環境の変化を認識する［音の変化］と，印象の変化の過程を表す［音の受容］，またそれを支えるものとして［町の人の心持ち］がある．特に［音の受容］は，［生活との密着］の中で音を聴くという状況を支える住民の姿勢の表れであり，重要な概念であると考えられる．

- *天理教の人たちなんか 9 時になるとジャンジャンジャンって始まるのよ。でも、それはそこの生活の一部になっているから、もう 9 時になった、って言う感じでみんな思いますから、あそこ本当に*

やかましいとか誰も言わないですよ。（E）

d）まちや生活の中での認識

以上のグループでの認識を通じて，郡上八幡のまちとの関わりや地域アイデンティティといった観点から音が理解された認識の状態として【まちや生活の中での認識】があると考えられる．この中で［イメージとしての認識］は，水の音や季節的な行事など，具体的な音事象や場所と結びついて想起されやすく，3 章で述べた八幡のサウンドスケープの実態との関係が見られる認識の状態である．一方で［媒体としての認識］は日常の［生活との密着］とより深い関係があり，音を手がかりとした生活習慣が身に着けられたり，見えないものの状況や気配を察知するために用いられたりする．

- *うちの姉は必ずね、朝洗濯するの。チンと秋葉様の鐘が聴こえてくるとき、ちょうど私は洗濯しとる。あーそうかそんな時間に早洗濯かって、そういう風な感じで。*（E）
- *言葉で言うと、しんしん雪が降るとよくいうでしょ。ああいう感じがね、朝起きると、窓開けなくても、雪が降っているのはわかるのね。*（I）

これらは［イメージとしての認識］と異なって特定の音との結びつきがわかりづらいものであるが，生活と密着した郡上八幡のアイデンティティを構成する一部であると考えられる．また，認識の状態は［無意識］であるが，同時に［生活との密着］が意識されている発話も見られた．

以上より，地域認識としてのサウンドスケープの構造として，【具体的な場面での認識】によって下支えされた【まちや生活の中での認識】と【認識の変容】があり，中でもアイデンティティにもとづく【まちや生活の中での認識】では，特定の音との関係が明確な［イメージとしての認識］と，生活の中で地域アイデンティティを構成する［媒体としての認識］があることが明らかになった．

5. 結論

本研究では，郡上八幡でのインタビュー調査をもとに，地域のサウンドスケープの時間的構造，空間的構造を明らかにし，郡上八幡における地域認識としてのサウンドスケープの構造を明らかにした．

本研究を通して，地域アイデンティティ的なニュアンスを持つ認識の形として，大きく［イメージとしての認識］と［媒体としての認識］の 2 点があると明らかになった．このうち，［イメージとしての認識］は，住民に語られた音事象の分析から明らかになった特定の音事象や地域のサウンドスケープの時間的構造，空間的構造との関係が明確であり，デザインや保存の対象となる音がわかりやすいものである．一方で［媒体としての認識］は，特定の音事象や場所との結びつきがわかりづらいが，［構築環境の状態］などによって成立している音の認識であり，それらが変化，喪失してしまうと成り立たない認識である．このことから，今後の地域におけるサウンドスケープのデザインの方向として，わかりやすい音事象の保存だけでなく，日常生活での音の認識を下支えする町家の通り土間や坪庭といったものの保存を行うような，音からの地域アイデンティティの保全における新たな展開が考えられる．

＜参考文献＞

1) 西村奏絵，佐々木葉：地域認識の把握手法に関する研究レビュー，第 51 回土木計画学研究・講演集，2015
2) 星野裕司：親密な未知としての風景 -生命的風景論へむけた一試論-，景観・デザイン研究論文集(7)，pp. 37-48，2009
3) 吉村晶子：風景/景観に関する言説にみる景観概念，風景体験類型及び説明モデルに関する研究，景観・デザイン研究講演集，No. 3，pp. 76-86，2007
4) 鳥越けい子：サウンドスケープ その思想と実践，鹿島出版会，1997
5) 土屋十圀，中村良夫：親水水路にみる流水形態と音環境の特性，造園雑誌，56 巻，5 号，pp. 229-234，1992
6) 長谷部正彦，福村寿敬，粂川高徳：サウンドスケープの視点からみた河川流水音のゆらぎについて，環境システム研究，23 巻，pp. 548-553，1995
7) 三浦秀一，佐々木由佳：山形市市街地における農業用水路の景観と音環境に関する調査研究，日本建築学会計画系論文集，63 巻，513 号，pp. 61-68，1998
8) 荒井歩：郡上八幡における水路網と伝統的音環境に関する研究，ランドスケープ研究，65 巻，5 号，pp. 711-716，2001
9) 古川日出雄：まちの音と住民の想起する生活像に関する調査研究 ー岐阜県郡上八幡を対象としてー，早稲田大学卒業論文，2009
10) 一般社団法人日本サウンドスケープ協会 HP，http://www.soundscape-j.org/
11) 永幡幸司：音環境の調査法 -ISO 12913 シリーズに基づくサウンドスケープの調査法-，日本音響学会誌，75 巻，8 号，pp. 473-480，2019
12) 佐々木葉：地域景観の議論のためのメモランダム，景観・デザイン研究講演集，No.7，pp. 160-165，2011
13) 佐々木葉：地域およびその認識の風景を考えるためのノート，景観・デザイン研究講演集，No.16，pp. 471-479，2020
14) 鳥越けい子：サウンドスケープ研究の課題と展望 神田地区におけるケーススタディーを通して，騒音制御，11 巻，3 号，pp.141-146，1987
15) 鳥越けい子，庄野泰子，田中直子：建築物の性格が都市の聴覚的景観に及ぼす影響に関する基礎研究(1) 神田地域における 5 つの道を中心に，住宅総合研究財団研究年報，16 巻，pp. 209-221，1990
16) 平栗靖浩，川井敬二，辻原万規彦，河上健也，矢野隆：アーケード街路の音環境 ：熊本市・長崎市中心市街地における実測調査，日本建築学会環境系論文集，71 巻，604 号，pp. 1-7，2006
17) 坂本優紀：石川県金沢市における用水路が作り出すサウンドスケープ，地理科学，73 巻，4 号，pp. 197-211，2018
18) 金炳哲，杉本正美，包清博之，藤本一寿，中村洋：サウンドスケープと都市空間の係わりに関する考察，造園雑誌，54 巻，5 号，pp. 263-268，1990
19) 平尾和洋：等音圧分布と周波数特性に基づく京都における音環境に関する一考察，都市計画論文集，36 巻，pp. 835-840，2001
20) 川井敬二，平手小太郎，安岡正人：環境認知の観点からの人間-音環境系の記述に関する研究 ：環境認知機構モデルとその音環境への適用，日本建築学会計画系論文集，62 巻，496 号，pp. 9-13，1997
21) 山本徳司，栗田英治，重岡徹：農村の音環境の動的計測手法に関する一試案，農村計画学会誌，29 巻，Special Issue 号，pp. 269-274，2010
22) 川井敬二，小島隆矢，平手小太郎，安岡正人：環境音の印象評価構造に関する研究 被験者自身の言葉に基づいた評価構造の抽出，日本音響学会誌，60 巻，5 号，pp. 249-257，2004
23) 足立重和：ノスタルジーを通じた伝統文化の継承ー岐阜県郡上市八幡町の郡上おどりの事例からー，環境社会学研究，10 巻，pp. 42-58，2004
24) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー論 現代社会学ライブラリー 17，弘文堂，2014